

Clever imitation

東雲咲夜

crever imitation

私の友人も、彼の友人もみんな幸せそうだねっていう。

そんなこと言わないで、よく眼を凝らしてご覧？

もう一度同じ事が言える？

学校の授業が終わり、私は校門へと急ぐ。

どうにも金曜日はみんな騒がしい。休日に向けての計画でも立てているのかしら。

ざわめく廊下を抜けて、下駄箱で靴を履き替えて。

彼はきっと几帳面だから、私よりも早く着いているはず。

待たせてはいけないと何故か焦りながら。

心に浮かぶのは、期待と恐れ。

辿りついた校門には予想道理、既に彼がいた。

「ごめんなさい。待たせた？」

門に寄りかかるようにして立っている、長身の男子生徒。

少し気だるげな雰囲気や常にかかっている彼は、私にふわりと微笑みかけた。

「俺も今来たところだから、平気だよ綾」

「それならいいけど……帰りましょうか」

「そうだね」

あがつまれん

我妻漣、それが彼の名前。

かすがあや

春日綾、それが私の名前。

私たちは、一応付き合っていて、世間一般で言う恋人という関係。

それなりに仲も良く、土日はデートをしたりもする。

彼はクラスの中でも結構の美形。

体つきはしっかりとしていて、性格も優しく、気配りが上手。

短めの髪型もよく似合っている。キレイな澄んだ瞳をしてる。

私は、一応醜くはないと思っている。あくまでも、私の予想だけれど。

「もうじき進級だね」

「そうね。いつの間にかそんな季節になってたなんて」

「俺達が最上級学年だって。何だか笑ってしまうね」

「何か思うことはある？」

漣、あなたは何を考えているの？

「特にないな。クラス編成っていっても、あまり均等に混ざらないしね」

「確かにあまり変化はないよね」

「まあ、進路関係とかは忙しくなるけれど」
「忙しくても、会ってくれるかしら？」
「もちろん。綾に会うための時間なら、いくらでも作れるさ」
それは、私に会いたいと言ってくれているという事。
普通ならばとても嬉しいこと、喜ぶべきこと。
けれど私は虚しくなるばかり。
不意に、彼が私の長い髪に触れる。
さらりと撫でるように掠めた彼の指は、どこことなくすぐったい。
「どうかしたの？」
「綺麗な髪に、ゴミがついていたから」
「ありがとう」
「明日はさ、空いているかな？」
「私？ もちろん大丈夫よ。いつも暇だから」
「それはよかった。おいしいお店を見つけたんだ、どうかな？」
「とても楽しみだわ。駅で待ち合わせでいい？」
「綾が好きなように」
「じゃあ、また明日会いましょう」
漣のその優しさが……私を串刺しにする。
冷たくしてくれたら、割り切れるのに。
人と会話しながら歩く道は、とても短く感じるもの。
学校から駅まではあまり離れていないせいで、余計に早く感じる。
帰りの切符を買って、改札口へと向かう。
通勤、通学帰りの人の群れに流されながらも後ろを振り返る。
そこには、もう彼の姿は見えなかった。

その日はとてもいい天気だった。
空は青く澄み切っていて心地よく。
爽やかな風が、様々な春の香りを運んできて。
柔らかな春の日差しはとても気持ちがよかった。
約束道理、私は彼と喫茶店でお茶をした。
アンティーク等が置いてある、落ち着いた店内の装飾。
ふんわりと甘い洋菓子に、品のいい香りの紅茶。
優しい雰囲気と一緒に耳に心地よい曲が流れている。
彼はこういうお店を見つけてくるのが何故かうまい。
女として羨ましいくらいに。私のセンスが悪いというわけではないけれども。
そこで二時間ほど談笑してから、いつもの場所へと向かった。
いつもの場所——街の外れにある、小さな川。

土手には、たんぽぽやつくし、なずな等の野草が咲き誇っている。
緑の絨毯に色を添える……黄色、茶色、紫色に赤色。
隣には、彼が座っている。私の肩を抱きながら。
とても、穏やかで落ち着く光景。

けれども、彼の瞳はどこか遠くを見つめていて。
私の心も違う人の事を考えていて。
それでも青空のなか、雲がゆっくりと流れていくのは、綺麗で。

私と漣が初めて出会ったのは、とある合コンだった。
親友が、一緒に来ないかと話を持ちかけてきたのだ。
彼女は、とてもかわいらしくて、優しくて。
合コン等やるのかと、とても驚いた気がする。
最初は乗り気ではなかったけれど、一回ぐらい参加するのもいいかと思って。
向かったカラオケで`彼`に出会った。
同じ学校の漣がいたことにも驚いた。
彼は、漣の親友という話だった気がする。
スポーツが大好きで、肌は健康的に浅黒かった。
元気がよく、はきはきとしていて、楽しそうだった。
今、その瞬間を全身で楽しんでいた。
私は彼に一目ぼれをして、漣は私の親友に恋をした。
それからの数ヶ月が——とても楽しかったと記憶している。
何処に遊びに行くのでも、そのペアで行って。
ダブルデートなんていうのもしたような気がする。
皆で、馬鹿みたいに笑っていた。
太陽みたいに、眩しいくらいに光輝いてた日々。
愚かな私はいつまでも、ずっと永遠に続くような気がしていたの。

永遠なんてモノ、ないかもしれないよ？
確か、彼女がいった言葉。私が、ずっと続いたらいいね、といった時に。
彼女は間違っていなかった。今なら、痛いほどわかる。
永遠なんてモノ……そんなものは存在しないの。

終わりは、いつも突然に。静かにやってきて奪い去っていく。

ある日、私の家に漣が訪れてきた。
珍しいと思いながら、漣を中に入れて。
何やら沈みこんでいる漣が言った言葉。

それは私にはとても信じられなくて。嘘だと叫びたかった。

いくら叫んでも、どうしようもない事実だというのに。

『彼女が交通事故で亡くなった』

漣が伝えた事。声は、やつれて悲しみに満ち溢れていた。

そして漣は、一粒だけ涙を零した。

最初で最後の漣の涙。

それでも私は泣けなかった。

それから、私と彼の恋もつられるように終わって。

私と漣は二人残された。

私の彼は、別の人と付き合いだして。

私達は四人でひとつだったのだと知った。

親友を亡くした私は、抜け殻のように漂っていて。

彼は死んだ訳ではないけれど、もう私の前にはいなくて。

二度とあの日には戻れないと知っているのに。

頭や身体が理解しても、心が納得していなくて。

まだ色鮮やかに彼の面影が瞼の裏に焼き付いていて。

眼を閉じれば、フィルムに映る写真のように浮かび上がってきて。

スポーツに熱中して、輝いている姿。

不器用だけでも、私を気遣ってくれたりもした。

その時に彼が見せた、はにかんだ笑顔。

力強くて、繊細な微笑み。

とても淡くて……^{おぼろ} 朧げな影。

忘れるくらいなら愛したりしない。

そんな時だった。

『付き合わない？』

とても甘い漣の言葉。

もしかしたら、心の片隅で、待ち望んでいたのかもしれない。

抗うのは簡単だけれど、そうすると私が消えてしまう。

親友を亡くした私には、代わりとなるものが必要だったから。

それは、恋人を亡くした漣も同じだったようで。

そうして私達は恋人となった。

偽りの、まやかしの恋人。

^{ありも}存在しない睦言を囁き合い、傷口を舐めあう関係。

それを友人達は、`幸せ`だという。

一体何処を見ているのかしら。その眼は飾りなのかと問いたい。

皿のようにしてよく見てよ。それでもまだそんな戯言が言えるのならば。

その眼は濁っているに違いないわよ。

お互いを熱く見つめる視線は、絡み合うことはなく。
深い傷口は交差して、交わりながら、血を流し続ける。

暗い夜に、温もりを求めて唇を重ねてみても。
癒しを求めて、幾度となく身体を重ね合わせてみても。
熱い身体から伝わるのは、凍えるような痛みだけ。
流れ込んでくるのは、虚無感。

渴望して、与えられるのは偽りの麻薬。
絶望して、奪われるのは愛情。
紛い物の温もりに身を浸しながら。
愛していない訳じゃない。嫌いな訳じゃない。
でも、心のそこから愛しているのとは違う。
彼を愛していたのとは、違う感情。
カタチのわからない、未知の想い。
本当に……好きなのかさえわからない。
そんな感情で、愛し合うことが出来ると思う？
いつまでも、触れ合うことが出来ずにすれ違い続ける。
それが、今の私たちの関係。
恋人という土台の上に立っている、崩れかけの感情。
何がきっかけで、いつ壊れてしまうかも解らない——脆く儂い夢物語。

隣に座る彼を見る。
少し寂しげな顔をして流れる川を見つめている。
彼が何を考えているのか、私には解らない。
私が何を考えているのか、彼には解らない。
繋がらない想い。

何もかも、全てが一方通行のみ。
やがて夕陽が顔を覗かせ始めた頃。

「そろそろ……帰ろうか？」

汚れを払いながら、立ち上がる彼。

優しく微笑みながら私に手を差し伸べてくれる。

「そうね。だいぶ時間が経ってるもの」

「また明日も会えるかい？」

「私は、いつでも空いてるわ」

嘘の微笑みを貼り付けながら答える。

「彼が……いないから？」

顔は笑ったまま、眼は笑わずに尋ねられてしまった。

「そうよ。漣も、彼女がいないから……暇でしょう？」

「ああ——そうだったね」

傷を舐めあいながらも、時にはお互いに傷を抉りあう。

癒えてしまわないように。

絆が絶えてしまわないように。

私達は、友人の死という絆で繋がっているから。

「じゃあ、また明日もあの喫茶店で」

「わかったわ」

私達は、寄り添いながら駅へと向かう。

また明日、会うために。

腕は組むけれども、手は繋がらない。指も絡ませない。

お互いがちゃんと向き合っていないことを承知の上での関係。

不安定な形を作りながら、時には少し崩してみたりする。

終わりたいのか、終わらせたくないのか。

彼が、私が優しく微笑むのは……利口な真似。

そうしていれば、続けることが出来るとわかっているから。

こんな、星屑よりも儂い関係だけど。

終焉がいつ訪れるのかわからなくても。

私は——笑うわ。

決して、悲しんだり嘆いたりしない。

涙も見せないし、媚びたりしない。

それが、自分への戒め。

関係が崩れて、消え去っても……私は笑い続けて見せるわ。

だから、漣も笑っていてね。終わりが来るその日まで。

私達は、今日も偽りの愛を紡ぎ続ける。

時に激しく、時に冷ややかに。

ぐらぐらと揺れながら。

でも、こんなに不安定な関係なのに……。

何故か解らないけれど。

このままで在り続けたいと思うのは——変かしら？